



第111号  
北海道教育大学  
青陵会

(北海道教育大学岩見沢校同窓会)

会長 早瀬 公平

印刷 北海道社会福祉事業団福祉村  
(TEL 0126-45-2300)

〈題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです〉



- も ○巻頭言…… 1
- く ○支部だより…… 4
- じ ○各学科の活動状況…… 7～8
- 退職支部長からのメッセージ…… 2
- 特別寄稿…… 5
- 事務局だより…… 3
- 各学科卒業生代表の言葉…… 6

### 「創立百周年飛躍の年へ」

北海道教育大学青陵会 副会長 近田 勝 信



私達の生活を一変させた新型コロナウイルスは、二類から五類に変更される見通しとなったものの収束にはまだまだ程遠い感があります。加えて、昨年から物価の高騰など厳しい生活環境ではありますが、会員の皆様にはご健勝にてお過ごしのことと存じます。

さて、本年はいよいよ我が母校と青陵会の創立百周年記念式典・祝賀会開催の年となりました。現在、実行委員会では山本理人キャンパス長を実行委員長、早瀬公平同窓会長が副実行委員長として鋭意準備を進めております。これまで青陵会の周年事業は同窓会単独で実施しておりましたが、この度の百周年は大学と同窓会が共に連携してお祝いをするというかつて

ない取り組みとなりました。このことは、今後の大学と同窓会の協力関係において大変意義深いことと申します。式典・祝賀会が開催される九月二十三日には、大勢の大学関係者並びに同窓会員が集い、これまでの大学や同窓会に寄与された方への感謝への思いとこれからの大学と同窓会のますますの飛躍の機会となることを願っています。皆様の多数の参加をお待ち申し上げます。

最近の大学の様子は、授業はほぼ対面に戻りましたが、大人数の講義ではまたオンライン授業となっております。部活動やサークル活動は元どおりにできるようになり、学生達の元気な様子が見られるようになってきました。三月十九日には学位授与式が予定されており、約一八〇名の学生が旅立ちます。令

和三年三月の卒業生の進路状況を見ますと、一七七名卒業の内、民間五七％、公務員一二％、教員一二％、大学院進学一八％、その他一二％となっております。これは函館校と同じ傾向にあり、札幌校・旭川校・釧路校の教員約六〇％に比べると、教員志望割合はかなり低いと言えます。このことは、今進めている同窓会改革の大きな柱である「教員主体の組織から職種を問わず全ての同窓生が集う組織への変革」が求められる根拠となります。今後の課題は、卒業生と同窓会がいかに繋がるかにあります。昨今は、個人情報を出しながらない風潮があり、卒業生の所在を確認することは容易ではありません。また、時代の移り変わりと共に、同窓会そのものに関心を持たないなども懸念されます。このような大変難しい状況ではありますが、同窓生が気軽に親睦を図り末永く活動していけるよう叡智を集めて同窓会改革を進めて参りたいと存じますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

# 退職支部長からのメッセージ



でっかいどお。  
北海道  
空知支部長  
宮本 千裕

高校を卒業して二年間人生勉強を積ませてもらって入学した岩見沢校。あの頃「でっかいどお。北海道」

「北海道はでっかいどお」とよく耳にしました。本当に広くて、でっかくて、網走に流水を見に車を運転して行ったときは「どこまで走れば着くのか」と思いました。加えて、北海道で暮らす人の心も「でっかいどお」と気がつきました。気がつけば四年ほど千葉県にいましたが、再び北海道へと舞い戻ってきてしまいました。

初北海道は、二次試験の時でした。卒業から三十六年の月日がたつてしまいました。入試に来たときの雪の多さに圧倒され、クマゲラが迎えてくれた木立を抜けて、希望寮までの道でも覚えています。新しく建て替えられた希望寮に一年生として入寮。新歓コンパ、寮祭、花火大会、三階からのダイビング、そして談話室で先輩方に構ってもらっていました。結局四年間希望寮に住んで卒業を迎えました。あの頃、寮にいた仲間は今頃どこでどうしているのでしょうか。そんな

同じ時期を過ごした仲間と会うことが出来るのが百周年の記念行事ではないでしょうか。是非、お誘い合わせの上、岩見沢にお越しください。

開催期日は、令和五年九月二十三日となっております。ここにFacebookのアカウン トQRコードを添付しておきます。ご覧になってください。



さて、私ですが、教員に採用され、千葉県・渡島・空知、十一校を渡り歩き、最初に北海道に引越してきた学生時代を入れると十三回も転居し引越しました。女房や子供たちには苦労かけたと、そして、一緒にいてくれたことに今は感謝しかありません。家族がいたからこそ定年までこの職を全うできたのだと思えます。加えて、人にも恵まれました。

赴任した先々で感じたことは「努力していれば、誰かが見ていて認めてくれるのだ。」と言うことです。本心に懐が広くて深い方々に恵まれました。還暦を北海道で迎えられ、すっかり北海道に定住してしまいました。雪が多くて寒いけれど、日本で一番住み心地が良いのは北海道だと思いますよ。おおきに！北海道！！それは本年九月二十三日の「百周年を祝う会」で会いましょう。



同窓に感謝  
十勝帯広支部  
早川 一之

コロナ、コロナに翻弄され、あつという間に三年が過ぎました。現任校に異動してきたのはちようど三年前。日々、コロナ対応に明け暮れた感じですが。十勝帯広青陵会としても、なかなか以前のように集まることさえできず、何となく互いに疎遠になっていくようです。小さいながらも結束よく、仲間意識を持って、研修で高め合い、時として悩みを語り合い、その生き様を交流し、同窓の仲間として絆を深めてきました。少なからず寂しさを感じながらの退職となりそうです。若手の会員が多く顔を出してくれるようになったところだったので、心残りもありますが、すべ

ては次の世代にお任せします。昭和六十年、新卒として赴任した学校におられた青陵の大先輩に連れられて参加した懇親会、同じ体育研究室の入れ替わりの先輩がおられました。その他は大ベテランの先輩方ばかり。緊張しながら参加したのですが、ずいぶんと歓迎していただき、以来居心地よく、何とか都合をつけては参加してきました。それから多くの諸先輩方には大変お世話になり、多くの教えをいただきました。教諭時代に三名の青陵の先輩校

長先生にお仕える機会があり、管理職へと押し出させていただきました。指導主事会に在籍したときには、佐藤前同窓会長様をはじめ、諸先輩方に大変お世話になりました。学習会に何度か足を運び、学ばせていただきました。分らないことだらけの中でしたので、とても助かりました。また、広く北海道各地の同窓の仲間との出会いにとっても刺激を受けました。校長となつてからは、毎年の夏の学習会に本部理事長様をお招きし、後進の育成に努めてきました。というよりはその後の懇親会を楽しみにしていたのですが、。たくさんの方の先輩方をはじめ、同窓の仲間との出会いがあればこそ、今こうしてられるのだと感謝感謝です。ありがとうございます。

春には新型コロナウイルスが五類に変更されるとのこと。いよいよウィズコロナの時代となつていきそうです。集まれることも多くなつてきそうです。平成二十八年、十勝支部と帯広支部が合併して十勝帯広青陵会として新たなスタートを切つて六年。更なる会員の減少も心配ですが、小さな組織だからこそ、和気藹々とした同窓の絆を一層深めていってほしいと願っています。最後にありますが、北海道青陵会並びに会員の皆様の、今後益々のご発展ご活躍をご祈念申し上げます。

## 事務局便り

理事長 藤 田 祐 二

会員の皆様におかれましては、日頃から、青陵会の活動の推進に対し、ご理解とご協力をいただいておりますことに、心から感謝を申し上げます。

本年度も、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、親睦と資質の向上をめざす青陵会の事業の多くが中止や延期となり、また、各支部におかれましては、計画していた事業が予定どおりに進まなかったのではないかと推察するところです。一日も早く感染が収束し、再び同窓会活動の活性化に取り組むことができると期待しております。

さて、事務局では、創立百周年を9月に控え、大学と一体となって準備を進めているほか、同窓会の在り方検討委員会の最終答申の具体化に取り組みしておりますので、これらを含めこの一年間で取り組んできたことについてお知らせします。

### 一 令和四年度総会及び各部の主な取組について

総会につきましては、令和三年度同様、各支部への議案の送付による提案と、議決書の提出による議決を

行い、六月六日に総会議案が承認されました。

また、各部では、退職会員への会報の送付、研修誌「望岳」の頒布、期別の同窓会名簿の作成、会報の発行、学生活動支援事業の実施などに取り組んできました。

この三年間、新型コロナウイルス感染症の影響により、総会及び教育懇談会を実施できない状況が続きましたが、このところ、新規感染者数が減少傾向にあることから、令和五年度総会については予定どおり実施できるものと考えておりますので、各支部のご対応をお願い申し上げます。

### 二 創立百周年記念事業について

令和五年度は、青陵会と岩見沢校が同時に創立百周年を迎える記念すべき年となります。すでに岩見沢校と青陵会が一体となって「創立百周年を祝う会実行委員会」を組織し、二月末までに四回の実行委員会を行い、各部において具体的な取組の検討を進めてきました。

今後は、九月二十三日（土）に開催する記念式典及び祝賀会の内容をはじめ、記念誌の発刊、岩見沢市と連携した記念行事の実施等について

詳細を詰めていくこととなります。

また、記念式典及び祝賀会のご案内、記念行事・事業を行うための募金のお願いを、近日中に各支部にお送りするとともに、出席者や募金の取りまとめ等をお願いさせていただきますと予定しております。

青陵会の大きな節目となる創立百周年記念事業の成功に向け、会員の皆様のお力添えをいただきますよう、改めてお願いを申し上げます。

### 三 今後の同窓会の在り方について

同窓会今後の在り方検討委員会の最終報告で示いただいた「同窓会の入会を大学入学時に行い、大学在学中は准会員扱いにするなどの対応を検討する必要がある」という点を中心に、事務局において会則の見直しにかかわる論点を整理し、各支部と共有させていただくとともに、論点ごとにご意見をいただきましたところでした。

各支部からは、「大学と同窓会との十分な協議を深める必要がある」ということをはじめ、「現青陵会員への丁寧な説明を行う必要がある」、「同窓会費の納入について十分検討する必要がある」ということなど、たくさんのご意見をいただきました。

現在、事務局では、各支部からのご意見等を踏まえ、会則の改正作業に取り組んでいるところであり、今後、令和五年度総会でご議論いただくことができるよう、新年度の早い段階で、各支部に改正案をお届けしたいと考えております。

以上、一年間の主な取組をお知らせしてまいりました。

創立百周年を目前に控え、新型コロナウイルスの感染が収束し、岩見沢校と青陵会の節目を会員の皆様と盛大に祝いできればと考えております。また、創立百周年を契機として、青陵会をつながりが一層充実するよう努めてまいりたいと考えておりますので、引き続き、会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

### 北海道教育大学青陵会

(令和5年度総会のご案内予定)

日時 令和5年5月21日(日)

会場 ホテル・サンプラザ

※後日改めてご連絡申し上げます

百周年行事に関して、ホームページにて随時お知らせしますのでご覧ください。

<http://www.seiryokai.net>



# 支部だより



日高支部事務局長  
玉手 広昭  
(新ひだか町立静内小学校)

持続可能な組織を  
目指して

日高支部は、「会員相互の理解と親睦を深め、組織強化と研修の充実に努め、日高教育及び母校の発展に寄与する」という方針のもと、活動を続けてきております。ただ、各支部も同様とは思いますが、コロナ禍による影響で、最も重要としてきた、「会員相互の理解と親睦」の機会が失われてしまいました。総会は紙面にて行うなど、ここ三年間は会同することができておりません。事務局の怠慢も重なり、活動が停滞していることは否めません。しかし、コロナが少しずつ収束に向かい、以前の日常が戻りつつある中、日高支部の活動を再開し、今後の在り方も検討しなければならぬ時期に来ていると認識しています。

の諸先輩方でした。現職の管理職をはじめ、OBの方々にもお会いすることができ、日高教育の歴史や背景を学ばせていただきました。母校の共通した話題に花が咲き、同窓として仲間意識が高揚し、同窓会の存在価値を再認識したことを覚えております。さらに、同窓の諸先輩や仲間が、管内の教育団体や組織の要職に就くことも多く、大変誇らしく、そして心強く感じていた次第です。今もその流れは受け継がれており、品田支部長は日高地区校長会長を担うなど、管内教育においてリーダーシップを発揮しております。

日高支部の大きな課題は「組織強化」であり、以前から管理職中心の集まりになりつつありました。また母校の再編によって、教員になる学生の減少に比例して、日高青陵会の会員数も著しく減少しております。近隣支部との交流や再編も視野に入れないながら、活動を継続させていく必要があると感じております。

母校の様々な分野での活躍を耳にするたびに、嬉しさや誇りを感じているところです。今後母校を支え、学生たちを支えていくとともに、同窓の連携により青陵会を持続可能な組織として、さらに発展させるために微力ながら取り組んでいけたらと思います。今後ともよろしくお願いたします。



体験活動からの学び  
社会教育支部  
事務局長  
内田 暁史  
(ネイバル森)

今年度、社会教育支部は会員五名で活動を進めてきました。会員数は少ないながらも、札幌市と江別市の大学、砂川市教育委員会、ネイバル森、ネイバル足寄など、多種多様な職場で日々、社会教育に携わっています。

ため、オンラインでの研修や交流を積極的に取り入れて活動を進めていきます。

さて最近、社会教育支部で重要視していることの一つに「防災教育」があります。具体的な取組としては、全道に六施設ある北海道立青少年体験支援施設（ネイバル）で「ネイバル防災A・P」というものを進めております。A・Pとはアクティブ・プログラムの略であり、「アクティブに学び、アクティブに活かす」とを目的としています。各施設では、「体験活動を通して」というコンセプトを基に、ハザードマップを見る習慣を付けるためにウォークラリーをベースに作成した「ハザードマップラリー」を提供することや、主催事業では専門家と連携を図りながら、災害の仕組みや防災・減災について理解を深められるようなプログラムを展開しております。

上記のような取組を今後は、青陵会本部・各支部の皆様とのネットワークを活用し、一層広げて行ければと考えています。

最後になりますが、青陵会社会教育支部として、令和五年度は人材発掘と研修の充実を目標としていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

## 【特別寄稿】 「チャレンジ」 定年後の新たな活動



公益財団法人  
北海道サッカー協会  
会長  
越山 賢一

卒業生の皆さん、在校生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

原稿の依頼を受け、定年までの三十九年間、学生のみなさんとともに生活し、刺激を受けた楽しい教員生活を思い起こしているところです。さて私の専門はスポーツ心理学とスポーツコーチング、特にサッカー指導は北海道のサッカーのレベルアップに携わる教員や指導者を輩出することを私の責務と捉え、とても重要でやりがいのあるものでした。

私の指導者としてのスタートは、順天堂大学から始まり、特に学生コーチを兼任した四年次はサッカー一色の生活を送りました。その結果、千葉県天皇杯代表、大学院生コーチになつてからは関東大学1部リーグ昇格を果たすことができました。私が岩見沢校に着任した翌年には、指導していた選手が中心となり総理大臣杯で全国優勝を成し遂げるチームに育っていました。

さて、その頃の岩教大にはサッカーグラウンドがなく駐車場や野球場の外

野で練習をしていました。ボールは三個、部員十三名、そのうち大学からサッカーを始めた学生が半分というチームで、北海道学生リーグ三部という最下位からのスタートでした。しかし、夏は試合帰りの釧路川で鮭の地引網を間近で見ると実に楽しい時代でした。それから部員が二十名に達するまでに十五年近く費やしたと思います。

その間、私は道内初のJリーグの審判員としてトップゲームを裁くチャンスを得ていました。プロのプレーや戦術に加え、指導者からも多くのことを学ぶとともに、日本サッカー協会、地域協会やJリーグの役員と親交を深めることもできました。その後ここで得た経験を研究成果に結びつけ、コーチングの授業に役立てるとともに、サッカー指導では従来のコーチング理論に自分なりの考えを反映させたコーチングを検証することになりました。

さて、定年後の本題に入ります。二〇二〇年六月に公益財団法人北海道サッカー協会の副会長就任は、私のサッカー人生の集大成になるだろうと想像していました。

その後、前会長の定年に伴って次期会長選を打診されましたが、これは私の身の丈に合わないと感じ強く固辞し続けました。会長には協会トップ

として、ブレない姿勢・先見性・約束を守る責任感・コミュニケーション能力などが必要で、さらに私にとって最も求められることは組織のメンバーには民間会社役員や自営の方々も多いことから大学と違ってさまざまな価値観を調整するといふ難しさがあります。従って、自分より能力の高い方々を使えるリーダーシップ、という資質を持たない一介の大学教員にとつて協会運営は困難であることなど容易に理解できませんでした。しかし、スポーツ界の潮流は、政治家や大手企業の役員が会長に就く時代から選手としての経験者が就くようになっていたのです。東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣に橋本聖子氏、大学教員でありオリンピックの鈴木大地氏に続き室伏広治氏がスポーツ庁長官に就きました。日本バスケット協会や日本フエッティング協会に倣うように北海道サッカー協会も現場での経験や人脈などを生かすという観点があったのです。

しかしながら会長職を受けるか否か、長らく学生サッカー連盟会長、サッカー部の部長として私を支えてくださり、強く影響を受けていた音楽科の野村公名誉教授に相談したところ、シンプルなおアドバイスをいただきました。それは私が常に学生に伝えていたことです。「チャレンジ」。自問を繰

り返しましたが、たどり着いた結果は会長への推薦を受けることでした。私が定年退職した二〇二二年六月に理事会を経て会長に就任いたしました。その後すぐにサッカー協会の存在意義、どこに向かうのかというプランなど将来の姿を明確にイメージし、公表する仕事が続いていました。

さらに重要な実務は財務経営理念に基づいた予算執行です。会社務めの経験がない私にとつて、協会の大きな財源を任されることはとても重い責任となります。協会の年間の財源は日本協会からの補助金に、三万七千名を超える登録者の登録費と三〇〇以上に及ぶ事業の参加料を加えた三億四千万円規模です。この財源で各種大会、選手のトレーニング費用、大会運営資金のほか指導者や審判員、さらにボランティアの方々の人件費などを賄うことになるのです。

現在、常勤役員としてほぼ毎日岩見沢から札幌市内の協会に出勤し事務局員八名とともに働いています。オンライン会議が二〇時まで及ぶこともあります。来客も多く、さらに土日祝日には大会の挨拶や表彰式などで道内を飛び回ることもあります。このように結構忙しい会長職ですが、緊張感を持って人生最後のチャレンジを楽しみたいと考えております。どこかでお会いした際はぜひ気軽に声をかけて頂ければ幸いです。

卒業生代表のことば〜コロナ禍をのりこえて〜



専攻 ストレスマネジメント  
野 寛  
ツビノ  
芸術スポーツ  
鴻 太

私たちは、新型コロナウイルス

が流行する前の学生生活を過ごした、最後の世代です。一年生の時は、毎日一コマ目の授業があり、毎朝早起きをしてJＲで眠りながら通学していました。今ではそんな自分が信じられません。他専攻との学年全体の授業では、早めに教室へ向かい、友達と協力して後方の席を確保していたのも懐かしいです：（笑）

大学生活にも慣れ、もっと楽しくなる二年生を目前に新型コロナウイルスが流行しました。お酒を飲める歳になっても飲み会をできず、授業の対応も追いついてなく満足に受講できませんでした。空っぽな二年目でした。

残りの大学生ライフを謳歌するべく三・四年目は、対面授業が増加しました。三年生ですでに授業の数が少

なかつたですが：（笑）そんな中、学務グループへの申請や感染対策など自ら行動したことで、サークル活動を再開させることができました。周りの環境を言い訳にせず、自ら行動を起こすことが大事だと思えました。

入学時に想像していた大学生活とはかけ離れたあつという間の四年間でした。どんな状況でも仲間が居たから充実した学生生活になりました。大学で素敵な仲間に出会えたことに感謝です。



専攻 音楽文化  
石 坂 航

我々音楽文化専攻にとつての大学生生活は、自分自身の力で、どこまでやり遂げることができのかが問われ、挑戦し続ける四年間でした。

初年度は、不慣れな中でも日々から音楽の技術向上や音楽の感性を磨くため、切磋琢磨しながら、

日々の授業や練習に取り組むことが出来たと思います。しかし、その次年度から新型コロナウイルスの影響で我々の時間や出来ることが極端に少なくなり、すごく窮屈な思いをしたことを今でも鮮明に覚えています。

そのような中で私たちが一番に学んだことは、自分から学びにいかなくて、知識や技術は手に入らないということでした。普段は何もなくても、何でも先生から学ぶことが出来たり、先生が教えてくれる環境が当然だった私たちは、これを境に何も出来なくなり一人で困った人もいたと思います。

今では、授業も対面に戻りつつあり、普段の学生生活に戻りつつありますが、このような不意な出来事に対して、一人で努力し続けられる人が如何に強く、また不測の事態が起こることによって、その人の本当の強さが分かるのだと思えました。



専攻 美術文化  
高 橋 千 夏

私の四年間は「人」との出会い

で形作られてきました。期待を胸に入学した一年目は、同じ価値観や志向を持った多くの友人に出会いました。二年目は新型コロナウイルスの影響で、一人アパルトに籠もり、黙々と課題に取り組みました。そんな中でも、夜友人と集まり、散歩やランニングをしながら語り合った時間は、何物にも代えがたい思い出です。三年目は教育実習や就職活動などを通して、自分を見つめる機会が多くありました。四年目は悔いが残らないよう、自身の活動の幅を広げた年でした。活動の中で、自分にはない能力や魅力を持った人たちに出会い、さまざまな刺激を受けました。美術文化専攻学生が四年間で学んだものは、美術だけではないと思います。作品や論文制作の道中には必ず「人」とのつながりがあったと思えます。このつながりは、皆それぞれの道に進んだとしても

ずっと続いていくものだとは信じています。

最後に、皆仲良くしてくれてありがとうございます。これからもよろしくね！



スポーツ文化専攻  
山崎由菜

私は大学生生活で、目の前にある学びの場をいかに活用し自分の力にしていくかは、自分次第であるということ学びました。

一年生の時は体験する側として、授業の中で様々な経験を積みましました。二年生になり、コロナ禍で思うように活動できない時間を過ごし感じたことは、学びの場はいくらでも見つかるということです。オンラインだからこそ可能なことも多くあり、深い学びに繋げることも出来ました。

その知識や経験を活かして三・四年生では、教育実習で実際に生徒に授業を行うことや、ボランティア等で地域の子どもに活動を展開するなど、様々な場面で学んだことを活用することができました。

このような大学生生活で得た力と、ま

たそこから自分自身が活動を通して得た力は、自分一人の力では、身に付けることが困難であったと思います。

この四年間を通して関わってくださったすべての方に心から感謝し、次は自分がその機会を与える側として精進していきます。

### 各学科の活動状況

#### 「芸術・スポーツビジネス専攻の日常活動」

大城 あい

芸術・スポーツビジネス専攻は、芸術・スポーツが持つ価値と力を多角的なアプローチによって活用し、社会の課題解決に立ち向かうため、日々勉強に励んでいます。授業ではグループ・ディスカッションやプレゼンテーションなど、学生主体による実践的な学びの場が提供されています。

一年目では「経営学概論」や「マーケティング概論」など、四年間の土台となるリテラシーを身につけ、二年目では芸術系とスポーツ系合わせて七つの研究室に仮配属し、各教員の専門領域を深く掘り下げます。三年生では実際の企業の業

#### 「音楽文化専攻の日常活動」

増川 里 菜

音楽文化専攻は、鍵盤楽器、管弦打楽器、声楽、作曲、音楽教育・音楽文化の五つのコースがありですが、それぞれのコースで音楽に関する専門的な知識や技術を身に付けることにより、地域社会に音楽文化を広め、親しんでいただけるよう日々勉強や練習に励んでいます。

今年度は原則対面授業となり、ビジネス棟にはコロナ禍以前のよきな活気が戻ってきました。また、昨年度はオンラインでの実施となつた三年生のケーススタディー発表会と四年生の卒業論文発表会は、今年度対面で実施されました。

私たち三年生は入学当初から新型コロナウイルスの影響でほとんど大学に通うことなく、卒業まで残り一年となりました。思い描いていた学生生活とは異なりましたが、オンラインでの実施により時間を効率的に活用することができました。今後も置かれた状況で最大限成長できるように、日々頑張っていきたいと思えます。

今年度も新型コロナウイルスの影響による制限はありましたが、専門科目の講義は全て対面授業で受けることができました。また、室内楽やピアノアンサンブル、合奏などは、感染対策を徹底した上で、ほとんど制限なく活動することができたため、昨年度に比べてより深い学びを得ることができました。音を聴き合い、曲に対する考え方を話し合い、仲間と共に音楽を創る時間を過ごすことで、互いに刺激を受け、高め合うことができたことはとても貴重な財産となるでしょう。

今年度十二月に行われた定期演奏会では、岩見沢公演・札幌公演合わせて約六五〇名のお客様にご来

場いただき、地域の方々日々の練習の成果を発表し、楽しんでいただくことができました。特に、最後に演奏したレスピーギ作曲の「ローマの松」は、非常に難しく、練習ではとても苦戦しましたが、曲のフィナーレでは、バンドと呼ばれる別働隊がホールの客席からも演奏し、迫力のある演奏をお届けできました。お客様からも素晴らしいお声をたくさんいただき、大盛況に終わることができました。

来年度は岩見沢校が創立百周年を迎え、その関連コンサートも行われる予定です。今後、数々の演奏会などを通して、地域の皆様に音楽に親しみ、楽しんでいただけるよう、学生一同これからも一層精進してまいりたいと思います。

「スポーツ文化専攻の日常」

白 旗 楓 人

スポーツ文化専攻は、高度なパフォーマンスを競い合う競技スポーツ、健康増進を目的としたフィッツ、トネススポーツ、多様な人々と楽しみを共有するアダプテッド・スポーツ、そして身体全体で自然に向き合うアウトドアスポーツなど

のスポーツの特性を科学的に理解し、地域の人々の暮らしを豊かにしていくため、日々勉強や部活動等に励んでいます。

私が所属するスポーツ・コーチング科学コースではボールゲームや器械体操など実技科目を始め、バイオメカニクスや運動生理学などの座学を通してスポーツから派生する身体についての知識や指導法等様々な内容を幅広く学んでいます。一年目・二年目では対面での実技や座学授業がありますが、私たちの学年はコロナが蔓延したこともありほとんどの授業がオンラインとなつてしまйнаかなか大学の授業というものを実感することができませんでした。

しかし、自分で自由に使える時間が多く取れたことで各々の取り組みたいことに熱中できたのではないかと思います。三年目になり徐々にコロナに対する規制が緩和され、ようやく大学生活を送っている実感が湧いています。後輩たちを見ていても羨ましく、大学生生活をやり直したいという気持ちもありますが、今自分にできることを全うし、さらにスポーツに関する学びを深めていきたいと思

います。今後、コロナが収束し華やかな大学生活を送ることができ世の中になることを心から願っています。そして、卒業や就職、社会人生活への準備として残されたわずかな時間を有効活用し北海道教育大学岩見沢校の学生として誇りを持ち日々精進していきます。

編 集 後 記

会報一一号をお届けいたします。年度末の多忙極まる中にもかかわらず、玉稿をお寄せくださった皆様に深く感謝申し上げます。発行となります。本当にありがとうございます。

さて、今後の広報誌の在り方ですが、次号からは同窓会改革の環境として、会報は年一回の発行とすることになっております。ただし、次年度は百周年記念式典があることから、その情報提供の一つと位置づけられることを踏まえ、式典前に発行すべきと考えております。ついては、ご寄稿の依頼は年度明けの早い段階から始めるよう計画しております。年度初めの大変お忙しい時期であり、誠に申し訳なく存じますが、何卒、ご理

解とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

また、令和六年度からは、より親しみやすく、読みやすい広報誌にするために、デザインを一新して発行することになっております。こちらは、百周年記念事業の終了後に協議を重ねて決定していく予定です。ですので、ご寄稿の依頼があつたときは、何かとご多用とは存じますが、お力添えくださいますようお願い申し上げます。

⊆広報・情報発信担当⊇

・部長 林 宏和

(上砂川中学校)

・副部長 神 島 亘 基

(豊沼小学校)

・副部長 渋 谷 憲 一

(妹背牛小学校)

・部 員 一ノ瀬 健太郎

(岩見沢東小学校)

小野寺 秀 樹

(深川中学校)

沢 泰 宏

(岩見沢第一小学校)

大 山 敏 広

(北広島大曲小学校)